魚食文化四世紀の歴史発掘

日本橋魚河岸の来歴

第一回　魚河岸ができるまで

執筆・冨岡 一成

挿絵・森 火山

近年、日本食がすぐれた長寿食・健康食として世界各国から注目されています。しかし、その一方でわれわれ日本人が、食に対する感性を希薄化させているのもまた否めません。豊かな風土に恵まれた日本ですが、先祖はさらなる豊かさを求めて工夫を重ねてきました。その最たるものが魚食です。痛みやすく運びにくい海川の幸を、知恵を駆使して食べてきたのが、この国の魚食文化であったように思います。

米と魚の民といわれるように、魚食は日本人の食の中心です。そこで、現在の築地市場の前身ともいえる日本橋魚河岸の来歴をみることは、日本人と魚のむすびつきを知る手がかりになると考えました。魚河岸がどのように生まれたのか。その創始者といわれる森孫右衛門を追いながら、魚河岸誕生の数奇な運命をみていきます。

江戸っ子の見本のようだ

魚河岸とはかつてお江戸は日本橋のたもとにあった魚市場のことをいいます。天正十八年（一五九〇）摂州西成郡佃村の名主森孫右衛門（もりまごえもん）を筆頭とする漁師三十四名が家康に従って江戸入りしました。かれらは江戸の前海の漁業を許されるかわりに捕った魚を御城に納める役目を負います。そして、その残余の魚を市中に販売したのが魚河岸のはじまりとされます。

元禄の頃（一七〇〇年頃）江戸は人口百万を数える世界一の大都市であったといわれます。その商業の中心地日本橋にあって魚河岸はとりわけ繁栄をみました。「朝千両」といわれ、江戸では日に三千両という金が流れるが、そのうちの千両は朝、魚河岸で動いたといいます。昼は芝居町で千両、夜は吉原で千両の都合三千両。江戸市民のたんぱく源である魚介類を一手に引き受ける魚河岸の繁昌ぶりがうかがえます。

しかし単に売れ口の良い市場というばかりでなく、そこに生まれた鼻っ柱の強い独特の気風もまた際立っていました。現在、日本橋北詰に建つ旧魚河岸の碑「乙姫像」。そこに添えられた久保田万太郎氏による碑文には「江戸任侠精神発祥の地」とあります。任侠精神とは強きをくじき弱きを助けること。御用魚を運搬するときには大名さえも道をゆずったという逸話にみられるように、小田原町の連中はたいそう侠気に富んでいました。また鮮魚を扱うから何事も手早く行動も言葉づかいも小気味良い。さっぱりとして男らしいことを「いなせ」というのは、魚河岸の若い衆の髷（まげ）が魚のイナ（ボラの幼魚）の背に似た鰡背銀杏（いなせいちょう）だったことからきているといいます。人びとはその威勢の良さに江戸っ子の見本のようだと喝采を送りました。

大消費都市江戸において、魚好きの江戸市民のお腹を満たすとともに、かれらの心象的シンボルとして信望を集

日本橋北詰にある「乙姫像」

冨岡一成
（とみおか いっせい）

1962年東京生まれ。魚河岸野郎㈱取締役。博物館やイベント企画等の仕事を経て築地市場に勤務。
日本橋時代から連綿と続く“河岸の気風”を身をもって知り、十年前から市場の古老から聞き取りを開始。その後、ＨＰ『魚河岸野郎』『築地の魚河岸野郎』の制作に携わり、幅広い史実調査に基づいた“魚河岸三部作”（「魚河岸四百年」「講談魚河岸年代記」「再現日本橋魚河岸地図」）を発表、高い評価を受ける。以降も執筆、ブログ等を通じて、重厚な歴史記述から奇想天外な読み物まで、消え行く魚河岸を“河岸の表現者”の視点から描き続けている。
HP『魚河岸野郎』
http://www.sakanaya.co.jp
『築地の魚河岸野郎』
http://www.uogashi.co.jp

めた魚河岸の果たした役割は少なからぬものがあったでしょう。

伝承の世界にはじまる

明治二十二年（一八八九）魚河岸会所に勤める川井新之助によって書かれた『日本橋魚市場沿革紀要』は、市場に残る史書を年代記にまとめたもので、魚河岸を知る上で欠かせない基礎資料となっています。そこに収められた「魚問屋ノ起原」が森孫右衛門の物語として巷間に伝わりました。ここでその要約を掲げてみます。

『天正年中（一五七三～一五九二）、家康公が上洛の折、住吉神社に参拝されたときに川を渡る舟がなく難儀したが、安藤対馬守が佃村名主の見一孫右衛門に命じて、かれの支配の漁船で無事に川を渡ることができた。その際に孫右衛門の家に立ち寄りご休息なされたので、古来より所持していた「開運石」を御覧に入れたところ、家康公は「この神石を所有することは開運の吉祥なり」と喜んで賞美し、差し上げた白湯を召し上がった。そして屋敷内の大木の松三本を御覧になって「木を三本合わせれば森となる。今後は森孫右衛門と名乗るがよかろう」と仰せになり、孫右衛門はありがたく賜った……』

『日本橋魚市場沿革紀要』明治22年刊（魚市場銀鱗会所蔵）

渡し舟、開運石、松の木と、伝説めく道具立てによって語られる家康との邂逅は、魚河岸誕生のエピソードとしてつねに引合いに出される有名なものです。ところがこれと似た話が他にも残っていて、たとえば芝市場には「天正十八年、家康公が芝浦を通航の際に浅瀬に乗り上げて難儀したのを救助」する由縁が伝えられています。さらに同音異曲のものは各地にひろがっており、家康の危急を救うパターンは家康伝説ともいうべきもので、江戸時代に特権を得た者の由来によく登場してきます。

ともあれ奇縁を得た孫右衛門たちがその後どうなったか。続きを読んでみましょう。

『……慶長四年（一五九九）に家康公が伏見在城の際には御膳魚の調達につとめ、徳川軍が瀬戸内海や西国の海路を隠密に通行するときは、孫右衛門の漁船でとどこおりなく通行させるなどの手助けをしたが、とくに慶長十九年（一六一四）の大坂冬の陣、及び翌元和元年の夏の陣では、漁船を軍船に仕立てて、付近の海上を偵察し毎日、本陣へと報告をした。

この褒美として佃村、大和田村の漁民に大坂城の焼け米を大量に下され、大坂表町屋敷地一万坪余を拝領される。しかしこの土地には持主があったため、両村の漁民らは困り、その旨を申し上げると「それはもっともなこと」となり、「何でも良いから他のことを願い出よ」とおっしゃるので、孫右衛門並びに漁民らは「江戸に出て末永く家康公にお仕えしとうございます」と申し出た。』

どうやら孫右衛門たちは御膳魚を届けるほかに海上での諜報活動などの軍事行動をおこなっていたことが判かります。

そもそも天正十八年（一五九〇）の家康江戸入りとは、秀吉の小田原攻めの際に家康軍の一支隊が江戸城を奪取したことによります。孫右衛門たちが家康に従って江戸に入ったのなら、まさにそれは江戸攻撃軍としての進駐を意味するのではないでしょうか。

戦時に功をあげるほどのかれらは、単なる漁師団ではなく、実力を備えた水軍のような存在だったことは想像に難くありません。論功行賞として、広く江戸湾の漁業権を得て、のちに佃島という居住地まで賜るのですから、よほど大きな働きもし、時に命がけの場面すらあったとも考えられます。

冒頭の住吉神社参詣は天正年間の家康上洛記録からみて天正十年（一五八二）とほぼ推定されますが、この参詣の直後、伏見滞在中に勃発したのが「本能寺の変」でした。家康は敵地の険しい山中をわずかの味方を伴って岡崎城までたどりつく生涯最大の危機「伊賀越えの難」にみまわれます。一説にはこのとき伊勢から三河までの舟行を手助けしたのが孫右衛門といわれます。その隠密的な行動をして「忍びの者」との説まで出てくるのですが、ありえない話ではないかもしれません。

孫右衛門の足跡をたどると戦国時代末期の物騒な社会状況に行きあたるようです。しかしすべて伝承によるもので、実体はつかみどころがありません。徳川政権成立時を詳らかにするのをはばかれる歴史と共に、魚河岸誕生の記録も埋もれてしまった感があります。

二人いた孫右衛門

魚河岸の研究では『日本橋魚市場の歴史』岡本信男氏、『魚河岸百年』三浦

慶長8年（1603）はじめて日本橋が架けられる（東京魚市場卸協同組合所蔵）

暁雄氏、『東京都中央卸売市場史上巻』木村荘五氏が、それぞれ精華を残されました。先人の労作に感謝しながら、ぼやけた魚河岸誕生のイメージを結んでみようと思います。

伝承の世界からきた孫右衛門は多くの謎をはらんでいて、生没年にしても不可解な点があります。築地本願寺にある供養塔には寛文二年（一六六二）に九十四歳で死没とありますから、逆算すると永禄十二年（一五六九）生まれ。家康との出会いである天正十年にはわずか十四歳です。あまりに若すぎるため、この謁見をかりに三十歳前後であったとすると寛文二年には百十歳にもなってしまいます。

森孫右衛門の供養塔（東京・築地本願寺）

また、最初に日本橋本小田原町に魚店を開くのは孫右衛門の子九左衛門といわれますが、史料には「長男九右衛門」、「孫右衛門二男」、「総領孫右衛門」とさまざまに表記され混乱しています。長男か二男か、九左衛門か九右衛門か、総領孫右衛門とはどういうことなのか。

岡本氏はこの不整合を、孫右衛門が長男に名主の家督を世襲させたことで孫右衛門が二人存在していたと推測しました。家康に謁見したのは父孫右衛門、寛文二年に死去したのは子孫右衛門、そして魚河岸に店を開くのは二男九左衛門。これで説明がつきます。初めて江戸へ下った天正十八年に長男は二十二歳。この頃に家督相続があったとすると、そこに孫右衛門の一族繁栄への深慮遠望をみることができます。

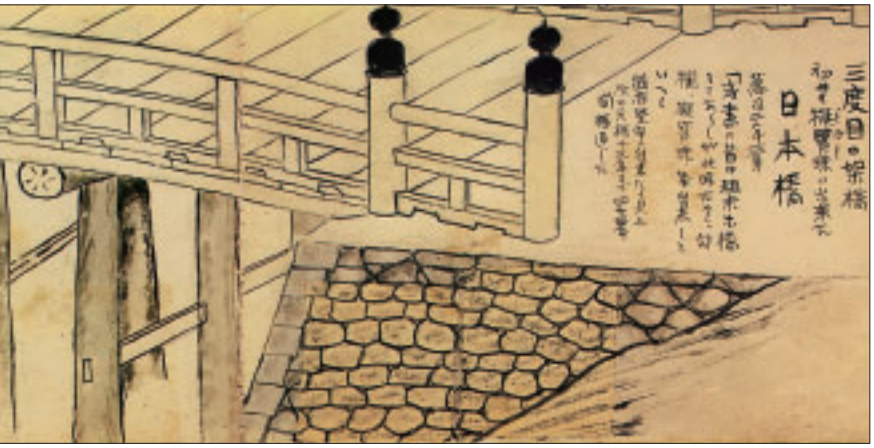
孫右衛門の出身地、西成郡佃村は大坂湾北部に位置し、天正十年以降秀吉の居城となる大坂城のお膝元ともいえる土地です。天下人の時世に大坂は年を重ねるごとに繁栄をみたことでしょう。いかに家康との知遇があったにしろ、孫右衛門が故郷を離れて一族郎党とともに江戸に移住するなどは大変な冒険であったはずです。

そこで孫右衛門は長男に名主の職を継がせて故郷を守らせるいっぽう、自らは二男とともに江戸の漁業権確保と移住に向けてのアプローチをはかりました。すなわち父子二代の孫右衛門は徳川と豊臣それぞれにヘッジしたとも考えられます。状況をみれば、そのような用心は当然のことかもしれません。

天正から文禄年間（一五九二～一五九六）にかけて二男九左衛門を含む七人の漁師が数度にわたり江戸に下っています。海上の諜報活動のためともいわれますが、主な目的は漁業でした。将来の移住を見すえての試験操業と思われます。この七という人数には興味深いものがあって、かれらの白魚漁は「六人網」という三人ずつ二艘の舟で行なう巻き網式漁法であり、予備も含め七人単位で操業したことに一致します。かれらは毎年十一月から翌三月までの白魚の漁期に東下しては網を引いたのでしょう。

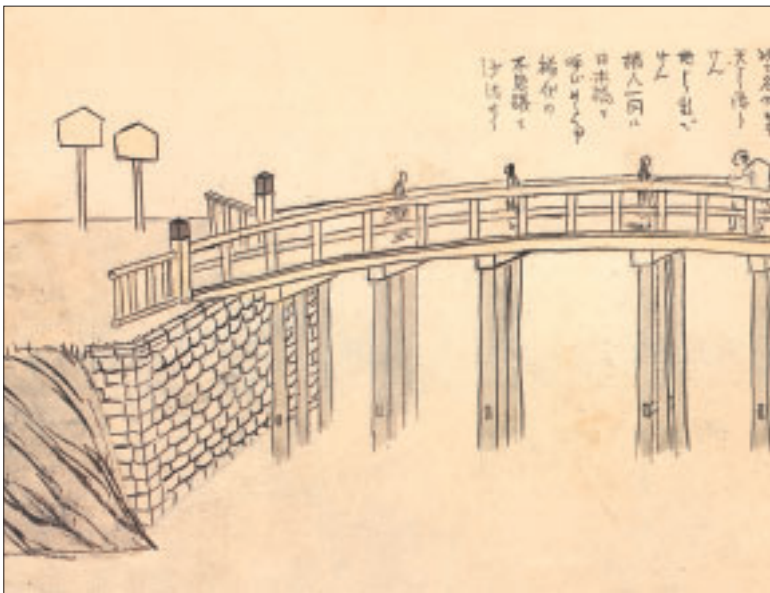
孫右衛門たちの江戸進出を援助していたのが「魚問屋ノ起原」にその名が出てくる安藤対馬守重信です。三河に生まれ生涯を徳川家に仕えた安藤氏は慶長十八年（一六一三）に老中職についています。この徳川重鎮の肝入で江戸での活動が可能となりました。これ以後も安藤対馬守の庇護のもとで孫右衛門たちは自らの地歩を固めていくのです。

慶長三年（一五九八）伏見城で秀吉が死去します。そして二年後の同五年には天下分け目の関が原の戦い。ここでも孫右衛門たちが参加したことはあきらかです。いよいよ天下の趨勢は徳川と決しました。その空気は大坂にも満ちていたことでしょう。しかし孫右衛門の行動はなかなか慎重です。本家佃村の漁民たちを大挙江戸に向かわせるのは時期早尚とみたのか、まずは先の七人の江戸移住がおこなわれました。



万治2年（1659）日本橋の三度目の架橋。初めて擬宝珠（ぎぼし）がつく（東京魚市場卸協同組合所蔵）

慶長九年（一六〇四）家光誕生のお七夜祝いに七人がお魚御用を勤めた記述が『沿革紀要』にありますから、移住は関が原以降二、三年で進められ、慶長九年までには魚店が開かれていたことになります。七人がそれぞれ出店したのではなく、九左衛門が最初の魚問屋をつくり、その集荷には全員であたっていたのでしょう。問屋といっても捕ったものを売るというきわめて質素なかたちですが、ここに記念すべき魚河岸の一号店が生まれたことになります。ただしこの店が開かれた場所は日本橋ではありません。



魚河岸起立は慶長十一年か十二年

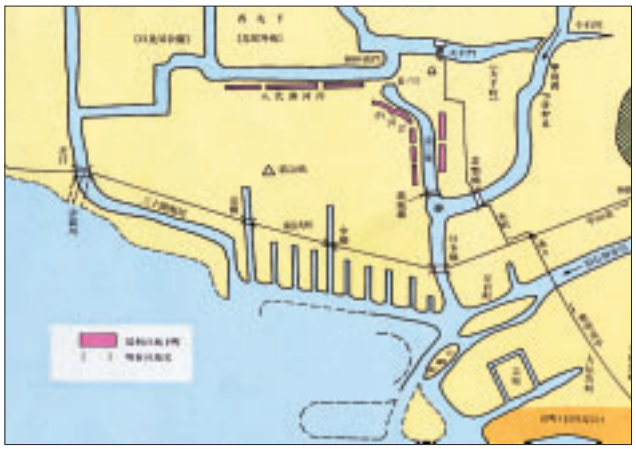
九左衛門の魚店は道三堀の河岸に出されたと考えられます。道三堀は家康江戸入り後まもなくつくられたもので、旧平川河口、現在の和田倉壕辺から一石橋まで開削されたものです。そこから江戸橋を過ぎて霊岸島の原地形にそって東進し、隅田川をはさんだ小名木川に接続すると、まっすぐに行徳をめざします。それは豊富な製塩地行徳と江戸を結ぶ重要な塩の運河でした。この道三堀筋が慶長の頃には新興商業地として商家が軒を並べる賑わいをみたのです。

ところで旧平川河口あたりは四日市といわれ、古くから四日ごとに市が立つ四斎市であったことが知られています。そこには魚市場があって塩干物が並び、ときに鮮魚までひさいでいたといいます。そうした繁昌地であれば九左衛門たちはぜひとも進出したかったのかもしれません。しかしそれは事情がゆるさなかったのでしょう。そこで四日市からほど近い道三堀に出店したものと思われます。

慶長八年（一六〇三）征夷大将軍となった家康は、翌九年には各大名に天下普請の号令を発します。ここまで江戸工事は徳川の家臣が慣れない土木作業に泣かされながら進めてきたのですが、これからは苦労も費用も他人持ちです。江戸の開発は急ピッチで進められました。日比谷の入り江が埋め立てられ、あらたに地割がおこなわれると、道三堀は江戸城外壕に組み入られ、周辺の商人らは日本橋際への移転が決まりました。日本橋の架設は慶長八年が定説で、江戸城本丸と外郭の本工事がはじまる慶長十一年（一六〇六）には日本橋界隈の町割りができていたものと思われます。したがって商人の移転がこの年から翌年にかけておこなわれたとすれば、日本橋本小田原町に魚河岸が開かれたのは慶長十一年ないし十二年と定めることができます。

道三堀から日本橋へと転進する時点で九左衛門の一店舗は七店舗に分かれます。ここで最初に江戸に下った七人を記してみましょう。カッコ内は市場での商号です。

森九左衛門（佃九左衛門）
森与市右衛門（佃九郎兵衛）
森作治兵衛（佃作兵衛）
井上与市兵衛（大和田与市兵衛）
井上作兵衛（伏見屋佐兵衛）
矢田三十郎（野田屋三十郎）
佃屋忠左衛門（佃忠左衛門）



慶長14年（1609）頃の江戸市街。海側の櫛形の地形は舟入堀（埠頭）　鈴木理生氏提供
『別冊歴史読本1989年7月号』（新人往来社）より転載

店舗拡大にともなって大坂佃村からの漁民の江戸移住がいよいよはじまります。それまで七人で漁獲・販売を行っていたのが、それぞれ魚問屋を経営することで漁業者が必要となるからです。ここに魚問屋を開く者と漁業者とに職分がおこなわれました。また、漁獲部門が切り離され集荷・販売に問屋の機能が固定されます。

川崎房五郎氏『佃島と白魚漁業』所載の「佃島旧記」によれば、漁民は慶長十七年（一六一二）七月に江戸に向かったとされています。十七年という

と日本橋開市後五年あまり経過しているので少し遅いように思いますが、あるいはこの間に移住が順次進められたということでしょうか。江戸に渡った漁民は佃村から二十七人、大和田村から六人の都合三十三人、ここに宮司一人が加わり合計三十四人とされます。宮司が入っているのは故郷のご神体を江戸に勧進するためですが、しかしかれらはまだ屋敷を持っていません。そこで登場するのが一族の庇護者安藤対馬守です。江戸に出てきた漁師たちが対馬守の屋敷などに分宿したことは『江戸名所図会』にもあります。

当初かれらの江戸漁業は口約束で許可されたのでしょうが、在地漁民との間で漁場争いが生じるなどのトラブルがきっかけとなり、公に漁業の免許状が下附されます。それは「江戸近辺の海川ならどこでも網を引いてもよい」というもので拡大解釈をすればどこまでも漁場を拡げられました。ふつう漁業権は漁獲対象ごとに細かく設定されるのに、乱暴ともいえるこの「お墨付き」は孫右衛門一族に対する特別の配慮でした。

さて、慶長十四年（一六〇九）に日本に漂着したスペイン人ビベーロが書いた見聞録に当時の魚市場の記載があります。

『魚市場という所がある。珍しいので見物すると、鮮らし

いものと干したものと塩したものを売っていて（中略）多種で大量なのと清潔に並んでいるさまは買う者の嗜好を増加する』

かなり立派な魚市場であったことがうかがえますが、どうもこれは魚河岸ではないようです。慶長十四、五年の風景としては魚河岸がこれほど発展したとは思われないからです。芝区史によれば徳川以前からの在地漁業者の開いた芝金杉の市場ということですが、岡本氏は塩干物を扱っていることを論拠に四日市が日本橋南詰に移転したのちの描写だとしています。いずれにしろ日本橋魚河岸はこの頃まだ目立つほどの規模ではなかったとみるべきで、むしろ周辺市場の賑わいがうかがえる状況でした。

しかし、これからわずか三十年ほどの間に魚河岸の規模は格段に拡がります。魚問屋の数は急速に増加、目をみはるほどの成長をとげてしまいます。そこには何があったのでしょうか。

関西漁業の関東進出

大坂湾から紀伊水道にかけた摂津・和泉・紀伊辺の漁村では、古くより奈良・京都・大坂など消費地へ向けての漁業が活発におこなわれてきました。多数の漁業者がいて、高度な漁業技術を有することから、近世にいたると近畿各漁場の生産性は飽和状態に達していました。そこで機会さえあれば他国への進出をうかがうという状況にあったのです。

その契機となったのが摂津の森孫右衛門らの江戸進出、および魚河岸の創設でした。あらたな巨大城下町の誕生と生鮮市場の出現によって関西漁業は堰を切ったように江戸を中心とする関東地方に流入します。

当時、関東の漁業はいまだに原始漁法の域を出ない素朴なもので、先進的な関西漁法とは格段の差があったといいます。三浦浄心の著した『慶長見聞集』には、「天地開闢より関東にて聞きも及ばぬ海底の大魚、砂底の貝を取りあぐる（中略）この地獄網にて取り尽くしぬれば、いまは十の一つもなし」と関西勢の大量漁獲に対し資源枯渇の危惧すら記されています。（ルビ引用者）いささか誇張した表現ですが、浄心は北条氏に仕えた古来よりの関東人。漁業の急激な変化に対する地元民の驚きを率直に伝えるものでしょう。

孫右衛門たちが特権を得たのは論功行賞であったにしろ、幕府は城内の鮮魚需要を満たすために生産性の高い関西漁民を積極的に江戸に誘致します。たとえば摂津あたりの出身とされる深川八郎右衛門が一族とともに江戸に来て漁師町をつくり、これが深川のはじまりとなります。かれらは孫右衛門とは別の系統ですが、やはり「家康入国以来」という伝統を誇り漁業権を得ています。このように関西から移住し漁業を営む者もいれば、資本をもとに江戸に魚問屋を開く者も数多く現れます。それら魚商人の参画によって魚河岸は急速に規模を拡大したのです。

関西漁業東進のもうひとつの理由として棉作の隆興がありました。戦国時代末期に渡来して慶長年間に畿内一円にひろがった棉作は、大量の干鰯を必要としました。そこで棉作農村を後背地に関西の漁民はイワシを求めて東海、関東、さらには東北、北海道まで漁場を拡げます。イワシ漁は大きな網、数多くの船を必要とし、漁業の大型化を進めた面があります。それはまた船主、網元らが商業資本によって大きくなり、漁民との格差ができるなど漁労の分化をもうながしました。

関西漁業に席巻された関東の漁業は短期間に再編成されます。その中心は一大生鮮市場魚河岸でした。産地では魚河岸からの距離により輸送の難易と魚価が左右されました。生鮮品を届けられる流通圏にあると、魚の鮮度処理や輸送手段である船の改良が進みます。近世では純粋な漁村はほとんどみられず半農半漁という形態をとりますが、これらの圏内では専業漁村も生まれました。とくに本芝浦、金杉浦、品川浦、大井御林浦、羽田浦、および神奈川県の生麦浦、新宿浦、神奈川浦を「御菜八カ浦」といって幕府御用を司る重要な漁場でした。これらは芝・金杉市場が集荷にあたりますが、事実上多くの荷は魚河岸に送られてから御膳魚として上納されました。

いっぽう生鮮品の出荷可能圏内からはずれると漁村として成立せず、海浜農村の形をとり、遠距離出荷が可能で低廉な五十集もの（干物、塩物、燻製など）の生産をおこないます。これらの地域では干鰯の需要も多く、外房の村では生と乾物のイワシをめぐって旅人（魚を集めて送る産地仲買人）らが荷を争うようなこともあったといわれます。

本小田原町に許可された魚市場区域は、本船町・安針町へと拡大していく（東京魚市場卸協同組合所蔵）

孫右衛門一族にライバル出現

魚河岸の急激な発展には関西漁業の関東進出がありました。魚問屋の起立人がほとんど関西の魚商人であったこともそれを如実にしめしています。当然のことながら当初の問屋参入は孫右衛門ゆかりの者であったろうし、過当

競争をさけるため一定数以上の問屋の増加を抑制もしたでしょう。しかしすべてが孫右衛門の思惑どおりとは進みませんでした。

元和二年（一六一六）活鯛納人（いけだいおさめにん）大和屋助五郎（やまとやすけごろう）の登場は孫右衛門一族による寡占を揺さぶるものでした。大和桜井からきて本小田原町に居住したこの魚商人は孫右衛門とは所縁（ゆかり）のないまったくの新参者。しかしかれは豊富な財力とアイデアによって画期的な鮮魚流通システムをつくりあげます。

大和屋助五郎は「活鯛船（いけだいぶね）」と呼ばれる生簀を備えた運搬船を開発。活鯛の遠隔地への輸送を可能にさせ、駿河、遠州を敷浦（しきうら）として江戸の需要をほぼ独占してしまいます。そこで培われた輸送や畜養の技術は後世に残されました。また、産地に多額の仕入金を渡しておき、漁具から賃金にいたるすべてを手当したうえで、広くその地方の魚を引き受けるということをしました。これは特定の産地仲買と結んで魚を集める孫右衛門ら従来の問屋のやり方からずっと進んだもので、これ以後は助五郎式にならって魚問屋が仕入金で産地を支配する図式が顕著になっていきます。

強力なライバルの出現に孫右衛門たちは警戒を強めたことでしょう。のちに組合を設立し、営業規則が定められたりするのは、新興勢力に対する牽制の意味合いもありました。また、これから百年の時を経て孫右衛門と大和屋助五郎の子孫が魚河岸の覇権をかけて争う事件も勃発しています。

しかし他勢力の参入は自然な流れでした。多くの登場人物によって魚河岸はその規模も機能も整えられなければならなかったのでしょう。それでも拡大を続ける巨大都市の需要は業者の思惑をはるかに超えて生産・販売・輸送それぞれの場面にたえず変化を与え続けていきました。魚河岸をつくり、他にない特権を得た孫右衛門一族でさえも、変化の波にのまれることはさけられなかったのです。

魚河岸、四百年の孤独

寛永七年（一六三〇）孫右衛門たちは鉄砲洲沖の干潟百間四方を拝領します。それから十五年かけて自分らで工事を行い、正保元年（一六四四）、造成完了した拝領地を故郷になぞらえて佃島と名づけます。孫右衛門父子二代、五十年余にわたった江戸漁業と魚河岸創設という二大事業はここに完成しました。

御用魚の残余を市中で売ったのが魚河岸のはじまり（東京魚市場卸協同組合所蔵）

天正十八年（一五九〇）家康江戸入りとともに魚河岸は誕生した――それは史実のうえでは正しくなくても、孫右衛門の偉業の記録として、永く語り継がれるべきであると思います。

こうしてつくられた魚河岸はおよそ元禄期に最盛期を迎え、先述のように江戸を代表するほどの景気をみます。しかし、いつの時代も他の商工業者とは一線を画す存在でした。自然の産物を扱うことから好不漁による流通量と価格の変動につねにさらされ、同業者が限られた市場地域のなかでしのぎを削ることを余儀なくされました。大きく儲けもするが、他を出し抜く迅速さも要求され、売場は喧騒と競争に明け暮れていきます。抗争や騒動も絶えまなく、社会情勢の変化とともに大多数の業者は姿を消していきました。

それは魚河岸の宿命的な性質なのでしょうか。世間とは隔絶された一種閉鎖的な商売のなかで清濁併せ呑みつつ流転してきたのが魚河岸です。その状況は現代においてもさして変わらないものがあります。平成の市場業者の苦悩も、あるいは四百年前に孫右衛門が感じたものであったかもしれません。

挿絵画家　森火山について

森火山（本名森薫三郎）は明治十三年（一八八〇）、日本橋魚河岸で魚問屋を営む森源兵衛（五世）の三男として東京・日本橋区本船町に生まれる。火山も同業の西長（本小田原町）で働くかたわら、独学で絵画を学ぶ。その後毎夕新聞、時事新聞に籍を置き、大正五年結成の東京漫画会に所属する。父親の薫陶を受け、本人自ら「日本橋魚河岸研究画家」を名乗り、多年の歳月を費やして江戸初期から大正時代に及ぶ「日本橋魚河岸の人と暮らしと商い」を絵筆により活写、克明かつ史料的価値が高い膨大な労作を今日に残している。昭和十九年（一九四四）十月、東京・港区白金にて没。

関連年表

天正十年	一五八二　父孫右衛門、家康住吉神社参詣の折に初の謁見か。本能寺の変起こる
十八年	一五九〇　家康江戸入府。このとき孫右衛門一族はじめて江戸にわたる。長男名主職を継ぎ孫右衛門を襲名
※この頃より二男九左衛門ら七人、たびたび江戸にわたる	
慶長三年	一五九八　豊臣秀吉死す
四年	一五九九　父孫右衛門、伏見城中の家康の御膳魚御用をつとめる
五年	一六〇〇　関が原の戦い
六年（?）	一六〇一　九左衛門が道三堀に魚河岸第一号店を開く
八年	一六〇三　家康征夷大将軍となる。天下普請はじまる。日本橋架設
九年	一六〇四　家光誕生祝の御用をつとめ褒美を賜る
※この頃までに孫右衛門一族の最初の移住が完了	
十一～十二年	一六〇六～〇七　日本橋本小田原町が市場区域となる。九左衛門ら移転
十五年	一六一〇　日本に漂着したスペイン人ビベーロ魚市場を見る
十七年	一六一二　この頃、佃・大和田村より漁民ら三十四名の移住がはじまる
十八年	一六一三　佃漁民らに漁業特権の免許状が下される。安藤対馬守老中職に就く
十九年	一六一四　大坂冬の陣で孫右衛門一族に軍功
元和元年	一六一五　大坂夏の陣でも功を重ね、焼米を拝領。大坂での土地拝領は固辞
二年	一六一六　大和屋助五郎、本小田原町に居住し魚店を開く
※元和年間（一六一五～二四）に魚河岸は順次拡大し、本船町、同横店　安針町なども市場地域となる。	
※この頃、町奉行島田弾正忠利正の改めがあり、魚河岸が正式認可される	
寛永三年	一六二六　本芝、金杉の魚市場が認可される
五年	一六二八　大和屋助五郎が活鯛事業を本格化
七年	一六三〇　佃の漁民に鉄砲洲干潟が下賜される
正保元年	一六四四　佃島が完成
明暦三年	一六五七　明暦の大火
寛文二年	一六六二　二代孫右衛門、摂津佃村にて九十四歳で死去

参考文献

- 岡本信男・木戸憲成著『日本橋魚市場の歴史』（水産社・一九八五年）
- 魚河岸百年編纂委員会『魚河岸百年』（一九六八年）
- 鈴木理生著『江戸はこうして造られた』（筑摩書房・二〇〇〇年）
- 荒居英次著『近世の漁村』（吉川弘文館・一九七〇年）
- 川崎房五郎著『都史紀要26　佃島と白魚漁業』（公文書館・一九七七年）